第 1 章
イギリス・ジェネラルバプテスト（1660 年まで）
（続き）

大叛乱の到来

長期議会は 1640 年 11 月に始まったが、間もなく教会を抑圧し、主教制の堅牢な組織であることが露わになった。これらの、またそれ以外の王権に対する様々な挑戦は、1642 年夏に内戦の勃発を惹き起こした。これによってイギリスのピュリタン革命が始まった。ピュリタン革命は他の非国教徒と並んで、あらゆるタイプのバプテストが発展する背景になった。当時の人々がバプテストを呼ぶ際に使った中傷的なレッテル「アナバプテスト」自体は、バプテストと多くの残虐行為を行ったアナバプテストとの関連を保証するに十分な用語であった。1 世紀前にミュンスターの凶暴なアナバプテストによって行われた暴挙についてはよく知られていたが、それとバプテストとの関係についてよく知る者たちはほとんどいなかった。その名称が何であれ、教会の伝統よりも聖書の権威をより大きく、それも根源的にアピールする非国教派は、宗教的・政治的体制には大きな脅威と映った。非国教派は度々、かなり急進的な仕方で個々人の内的確信を訴え、時にはそれを聖書に対峙させることさえあった。1649 年の王の処刑は、現存する社会秩序のヒエラルキーに対する致命的な打撃以上の意味を持っていた。民衆が神に選ばれた人物に対して手を挙げる時、多くの人々にとって、それが神への冒涜以上の政治的な行為と受け取られたのである。王を殺害した者たちの中には、ヘンリー・ローレンス（Henry Laurence）のように、バプテストの見解を持っていた、または持とうとしていた者たちもいた。

バプテストを含む非国教派の多くが唱えていた普遍的な信教の自由は、イングランド国教会や長老教会などの多くの保守的な信仰者にとって、個々人は自由に地獄への道を選び取ることさえもできるという要求以上の何ものでもなかった。1645 年 6 月 14 日、非国教派の思想を持つ野蛮な群れとみられていたニューモデル軍がネーズビーの戦いで勝利すると、これまで議会の大義を信じていた多くの人々は、かつて国王の私的な規則であった暴徒法（the rule of the King Mob）とは比べものにならないほどの脅威に満ちた専制主義を野放しにしてしまったと恐れ始めたのである。大学教育のある聖職者たちは、教育を受けたことがないばかりか、字を読むことさえできず、従来の霊的権威と伝統的な 10 分の 1 税の両方に異議を申し立てる「職工牧師」の登場とその増大を目のあたりにして大変憤った。これらのすべては、個々の教職者と彼らが受け取る給料に対する異議申立だけでなく、イングランド国内の教会の統一に対する異議申し立てでもあった。ピュリタン革命は、教会と国家についてこれまで誰も問うことのなかったこと、つまり教会と国家が不可分の協力関係によって結びつけられているという従来の明瞭な状況に疑義を呈した。そこでは教会は両者を結び付ける接着剤としての共通の信仰と社会の諸形態に対する神の正当性を提供する存在であった。しかし、これは 1646 年の時点で完全に消滅してしまい、その後、同じ形で再現されることはなかった。伝統的な秩序を支持して

来た人たちの中には、それが消え去ったことを理解できない者たち、または理解してもその事実を受け入れるのが難しい者たちがいたが、それは驚くに値しないまったく当然のことである。

もちろん、非国教派の反対者には自身の乱暴な言葉や行為の危険を誇張する傾向はあったものの、しかし、ごく普通の人たちの間にさえ急進的な政治思想は広がっており、それに度重なる内乱も相まって、社会状況が極めて不安定であったことを示す十分な証拠もある。1640 年代から 50 年代にかけて、イギリス国内の名もないような僻地から若者がかき集められ、軍隊に送り出されたが、その数の多さは、まさに権力を、それも剣という文字通りの権力を表しており、それはイングランド全土では説明するまでもないことだった。しかし、それが、依然として旧来のやり方に馴染んでいた人たちを深く当惑させ、時には怯えさせる多くの野蛮な言説や行為にもつながった。軍隊の内外にいた多くの非国教派たちは、自覚するか否かに関わらず、社会革命の要因となっていた。

社会改革に深い霊的不安定が要素として追加された。激動の期間に、人々の確信は苗木からその実りへと急激な速度で膨れ上がっていった。これについて歴史家が直面する数々の問いは次のようなものである。人々は、1644 年当時は自らの教区教会の忠実な信奉者であったが、1660 年のチャールズ 2 世の王政復古までには、長老派、独立派、バプテストはクウェーカーに転向したかもしれない。これは確かに、幾つかの断片的な証拠によって歴史家の注意を引くことだろう。しかし、だからと言って、その人々がかつて関係していた教会に依然としてメンバーとして止まり続けていたと推定するのは如何なものか。

バプテストの動機とその主張の宣布は理解されるべきであるが、それを行った者たちは、時々に抵抗や反対にあったことも同時に理解されなければならないということが、この背景に反している。多くの人々は、この期間、大きな不安を感じており、バプテストのように、堅固な教会と国家の伝統に異議を申し立てていた人々はその不安を増大させていた。幼児洗礼は、教会と社会を見事に結びつけていた。しかし信仰者のバプテスマは、教会を、教会としてふさわしいとする自負を持つ教会と、「生来」の社会的文脈であった教区教会とに分けてしまった。

ジェネラル・バプテストの伝道者たち

トマス・ラム（Thomas Lambe）は、バプテストの伝道者たちに著しい影響を与えた初期の例である。石鹸製造人で、最初にバプテストの信仰を受け入れたのは、おそらく 1640 年頃、コルチェスターでのことであろう。この信仰的見解を広めたために逮捕され、ロンドンで獄に繋がれた。釈放後は、伝道者としてグローチェスターシャで目覚ましい活動を繰り広げ、1641 年の末には、セヴァーン川で回心者に浸礼を授けていた。

1645 年には、ベル・アレイ、ロンドンのコールマン・ストリートで教会を指導していた。この共同体の様子は、トマス・エドワーズ（Thomas Edwards）の『腐敗の根源（*Gangraena*）』（1646 年）を通して、そのわずかなことが伺い知れるだけである。それによれば、その教会は大変活発で、会堂には若者が溢れていた。エドワーズも苦々しくも認めているように、「どこを見ても若い男女が群れていた」のだった。教会の礼拝は活気はあるものの秩序がなく、「まるで遊びに興じている」かのような騒

音を出していた。その結果、日曜日の夜には、様々なセクトのメンバーとその教会の会衆が合流し、説教や教義論争の興奮を分かち合っていた。複数の講話者と集まった者たちは、時には、話題に上がった説教者についてそれぞれの好むところを大声で話し出すこともあった。誰でも説教者の説教の最中、またその後に反対意見を述べることが許されており、あらゆる神学的な主題が議論の対象となった。その中には、選びについて、聖人の完全について、霊魂の不滅についてなどがあった。ラムの教会の少数の女性会員は安息日遵守者でなかったため、彼女らが日曜日に労働していることに地域住民はショックを受け、「彼女らは安息日を知らない。彼女らにとっては毎日が同じ日であり、そこにはいかなる違いもなかった」と評した。ベル・アレイの教会の結婚式は簡素で、司式者としての牧師は必要とされていなかった。新郎新婦は教会員の前で「共に生活し、互いをいたわるという告白」を行った。そして、出席者のある者が証人の署名をし、記録した。

1645 年から 46 年にかけて、トマス・ラムは助手を連れて自由に旅して伝道する働きを教会から許可され、エッセックス、ケント、サリー、ハンプシャー、ウィルトシア、そしてロンドン市内にまでも赴き、そこで自らの主張を広めて歩くことに成功し、伝統的な見解に立つ牧師たちを激怒させた。

1645 年のある時期、ロンドン市長はラムと彼の同僚の一人の説教者を逮捕した。その説教者は半年前にバプテスマを受けたばかりの二十歳の織物職人であったが、罪状は、つい最近、議会で決まった法令である未按手の者の説教の禁止に抵触したためであった。それに対して、ラムは「この人物は、この世の改革された教会から選任され、呼ばれた説教者である」と反論した。この弁護は受け入れられず、議会の委員会へ送られ、短い期間ではあったが獄に繋がれた。釈放されると「以前よりももっと大胆に、もっと頻繁に」説教を行うようになった。明らかにそれ以降、市当局はその法令を拘束力のあるものとして施行する意味がないという決断を下すに至った[1]。

この後、ラムはしばらくの間、クロムウェルの軍隊で軍隊付き牧師（チャプレン）となり、何人かの同僚たちと同じように、レベラーズ運動に関わった。ジェネラル・バプテストにおいて、1672 年ごろに亡くなるまで、活躍していた[2]。

エドワード・バーバー（Edward Barber）は、ロンドン・スレッドニードル通りに住んでいた仕立て業者で、王政復古以前に死去していたことは分かっているが、ジェネラル・バプテストの間で、確かに 1640 年代には活躍していた。1641 年の時点ですでに幼児洗礼反対と、教会税の支払い拒否でニューゲートの獄に繋がれていた。その年に、「至高なる国王たちへ（*To the kings most excellent majesty*）」と題した嘆願書を自分の名前で印刷した。当時、キリストの命令を信じる者たちが、その従順のゆえに「高位聖職者とその支持者たち」によって迫害を受けていたのだが、彼は、これら多くの「忠誠に満ちた忠実な臣民」のために弁明したのである。それは次のようなものである

> 誰も宗教の事柄で強制されるべきではない。なぜなら、福音は霊的なものであり、霊的な礼拝をする者を対象とするからである。そのような礼拝は、神の言と霊によるもので、霊

[1] *Gangraena*, I, 92-5.
[2] Crosby, III, 55.
[3] E. Barber, *To the Kings Most Excellent Majesty,* 1641.

が注がれ、言が聞かれる時と場で可能となる。人間の決まり事と偶像は神を喜ばせず、ただ偽善者を生むのみで、真実のキリスト者を生むことはない[3]。

この嘆願書は、当時、バプテストやその他の非国教派が推し進めていた良心の自由の抑圧に反対する議論の大筋を簡潔に纏め上げていた。

翌年の早春、バーバーはさらに「バプテスマ、あるいは沈めに関する小さな約定（*A small Treaties of Baptisme or Dipping*）」（1642 年）を執筆した。奇妙なことに、早い段階で、彼は議論を交えることもなく、「バプテスマ」は滴礼やその他のやり方ではなく「沈め」であることを当然のように考えていた。その一方で、信仰者のバプテスマについての神の意志を信じており、それに基づくある程度の具体的な方法も明らかにしていた。それは次のような 7 層で構成されていた。

（ｉ）キリストに対して自らを「安定」させる。
（ii）「キリストが我々をすべての罪から洗ってくださった」という確信を持つ。
（iii）聖霊が我々に注がれ、すべてを始めてくださり、すべてを完成してくださる。
（iv）我々は「地上における神の十全な体」と一つとされる。
（ｖ）「これはキリストによって着せられる装いである」
（vi）「我々は、キリストによってそれに向けて可能とされる」
（vii）沈められた者は「贖いの日に向けて目に見える印を付けられ」、「聖徒の交わりに連なる権利」を持っており、「キリストと共に十字架につけられ、死に、埋葬され、そして復活する」者たちである[4]。

1643 年、エドワード・バーバーは「アナバプテストと咎められるようにして呼ばれている、あるキリスト者たち」のために、嘆願書を書こうとしていた。そのため、議会議員とウエストミンスター会議の聖職者を招いて多くの教義的な課題をアナバプテストと討論させようとした。そこでは、もし彼らの反対者が、「彼らの牧会、バプテスマ、安息日が神の命令であり、（中略）我らが神に反して何かを行なっていることを証明できるならば、我らは感謝を持って真理の前に自らを低くし、悔い改め、我々の誤りを捨て去り、我々の思い込みの報いを受けるであろう」ということが意図されていた。しかし、この招待は実現しなかった[5]。

バーバーの教会はトマス・ラムによって牧会された教会で、1646 年頃、元国教会聖職者のフランシス・コーンウェル（Francis Cornwell）に端を発した「手を置く（按手）」やり方について論争が起こった結果、分裂した教会だったことは通説となっている[6]。コーンウェルは、その 2 年ほど前、セブンオ

[3] E. Barber, *To the Kings Most Excellent Majesty,* 1641.
[4] E. Barber, *A small Treaties of Baptisme or Dipping,* 1642, 11f.
[5] E. Barber, *The Humble Request of Certaine Christians*, 1643.
[6] H. Danvers, *A Treatise of Laying on of Hands*, 1674, 58.

ークス（Sevenoaks）のウィリアム・ジェフリー（William Jeffery）からバプテスマを受けていた。1646 年以降のコーンウェルについてははっきりしたことはわかっていないが、ジェフリーがケント地方で草創期のジェネラル・バプテストであったことは知られており、そこで仲間と協力して少なくとも 20 以上の教会を創設した。それ以外にもブラッドバーン＝セブンオークス教会も創設し、初代牧師となったと思われる。彼は霊の交わりの表現として、バプテスマを受ける者の頭に手を置く必要性を確信していた[7]。

ウィリアム・ジェフリーは、教会相互の協力を担う役員としての「メッセンジャー」となった最初のひとりだった。カルヴィン主義バプテストもこの制度の採用を考えてはいたが、決して正式なものとはしなかった。1645 年初頭、エドワード・バーバーは「福音の教役者の真正な在り方（*A true discovery of the ministery of the Gospell*）」を書いたが、その中で、それに対するジェネラル・バプテストの基本的な考え方を提案している。それによれば、「使徒、あるいはメッセンジャーの働きは消滅していない」のだった。その働き手の資質として、聖霊の働きによって回心し、「福音が教える真実の教会」の会員としてバプテスマを受けているだけではなく、「自己犠牲をよくする能力」の人でなければならなかった。また、「教会籍を置く自分の教会から」派遣されていなければならなかった。福音を宣べ伝え、バプテスマを授けることによってイエスの弟子達を集め、彼らを教会に根付かせねばならなかった。同時に、メッセンジャーは「教会では主人ではなく、教会から任命された（dispose）仕え人」であった。さらに、教会に経済的に頼ってはならず、「そのため、彼らは誰にもそれを働きかけず、また、誰もそれを強いられてはならない」のだった。メッセンジャーは迫害を避けず、「神がそう導かれるならば、福音を公に宣べ、福音を擁護するために、自分の命を差し出す」人であった。忘れてならないとしたのは、自分たちが「イエス・キリストの現臨と人格」を表している、ということである。この小さなトラクトは当然、長年の経験によって裏打ちされた内容と言うよりは、新約聖書の教える教役者についての聖書研究の域を超えていなかったが、バーバーはそれ以外にも牧師、教師、執事の責任についても述べ、明らかにそれらが新約聖書の教えるところにしっかりと沿っていなければならないことを示そうとしていた[8]

この時期、「メッセンジャー」という言葉は、ジェネラル、パティキュラーの両バプテストによる著作で表現される場合、ある不明瞭さを帯びていた。多くの場合、非常にはっきりと説教のために、また各個教会を超えた広い範囲で行われる集まりに教会を代表して派遣される教会の長老や教会員を意味していた。また、—これは他のバプテストにもなかったわけではないが、特にジェネラル・バプテストの間ではそうであったと思われるー、「開拓伝道のために送り出され、新しく教会を作る使命を担った人物を「メッセンジャー」と呼んでいたことも明白である。これはバーバーが述べていたことでもあった。しかしながら、メッセンジャーの働きに関するバーバーの概念は、教役者の 3 番目の役割と、当然の成り行きとしてのちにジェネラル・バプテストが提唱するようになる教会間協力の責任へと発展する種を有していた。アダム・テーラー（Adam Taylor）が言うには、「メッセンジャー」は「一

[7] Crosby, III, 97-9; W. Jeffery, *The Whole Faith of Man*, 2nd edition, 1659, 60-4.
[8] E. Barber, *A true Discovery of the Ministery of the Gospel*, 1645, 1-14.

般的には、特定の地域の代表が集まり（association）選ばれ、極めて厳かにその人物が籍を置く教会員によって按手をされた」のだった[9]。これは、明らかにのちに引き継がれたケースなのだが、この種の「メッセンジャー」の第 1 世代の働きは、伝道者本来の働きから発展したものであったと思われる。

バーバーの最後の著作も教役者に関するものであった。しかしここでは、長老派に鋭い批判の矢が向けられた。バーバーによれば、長老派の教役者は教会員の献金による牧師給だけでは満足せず、「豪華で贅沢な生活のために、極めてあさましく、かつ卑しく」その財源を獲得していたのである。キリストのための真実の牧師は神によって訓練されるのであり、オックスフォードの勉学によるのではないと、声高に主張した。キリストの教会を真に改革することを願う者は「神の言葉によれば」、人々が良心の自由を得ることを認める。これは彼が 1641 年、議論における応答として繰り返し述べていたことであった。苦難の共同体が真の教会であり、それを迫害するのは反キリストの印であると論じた[10]。

サムエル・オーツ（Samuel Oates）は、かの悪名名高いテトス（Titus）の父として記憶に留められることが多い。サムエル・オーツは、トマス・ラムと近く関係しており、1646 年にトマス・エドワードが彼のいつかの行状を記した時点では、ベル・アレイ教会とも近かった。エドワードと彼の間で交わされた手紙群はセクト主義者の最悪の行状とオーツに対する誹謗中傷を提供するに格好のものであり、その内容は当時の典型的なものであった。オーツの伝道は、現金払いという意味では大変有益であったと言われている。簡単に感動してしまう女性たちの間で主に活動し、バプテスマの際には、貧乏人には 2 シリング 6 ペンスを、金持ちには 10 シリングの支払いを求めた。その結果、「以前はかなり裕福で富んでいたのに、まったく裸同然の貧しさでエッセッスにやってきた」のだった。おまけに、彼による回心者のバプテスマがあると教会で大宴会を催し、後にそれを「主の晩餐と呼ぶことが認められた」とある。加えて性的な不道徳は常態化しており、彼がバプテスマを授けた女性を死に至らしめた疑いで、しばらくの間、牢に繋がれたとの報告もある。また、他の複数の告発もあったが、中でも、政府による納税の取り立てに関する説教を行い、教役者には納税義務はなく、イエス・キリストだけが法の大権者であるから、政府は教役者に法の執行をすべきでないという大胆不適なものもあった。

それがどの程度真実かどうかについて語ることは、まったく容易ではなかった。かの女性の死についてオーツにまったく責任がないことが明らかであったが、深刻なスキャンダルがつきまとったままで、1640 年代の後半から 1650 年代にかけて伝道者として活動を続けることができたとは到底考えられない。他方、彼と彼の仲間たちが意図的に反教職主義に迎合したことは疑う余地はない。彼らによれば、イングランド国教会と長老教会は両者とも進んで国から経済的支援を受けており、国家権力によるセクトの抑圧を歓迎し、福音の大義を裏切っているのだった。そのため、1646 年の 2 月、ボッキング（Bocking）のオーツの教会員の一人が、その集会を解散させる目的でやって来た下級巡査に、「彼らの教会へ、彼らのカトリック的な司祭の、偶像崇拝者の説教を聴かせるために」自分たちを捕らえに来たと嘲ったというのだが、それはまったくありそうなことであった。他方、1646 年、長老派の牧師群が、ロンドンからの援護が全くないため、地元の官憲がセクトとその活動の取り締まりに関して

[9] A. Taylor, *A History of the English General Baptists,* 1818, I. 413.
[10] E. Barber, *An Answer to the Essex Watchmens Watchword*, 1649, 1, 10, 16.

無力であるとの不平を漏らしていたというのは興味深い。より熱心で活動的な反対者はオーツの教会員に勝手に制裁を加えたが、それは別に驚くことではない。彼らは、エセックスのダンモー（Dunmow）の家から敵を引きずり出し、川に投げ込んだ。エドワーズが「その人物を全く沈めた」と淡々とした満足感とともに記録したのも無理はない[11]。

そのようなことも、1647 年から 48 年にかけて行われていたオーツの伝道への情熱の火を消すことはなかった。その間、ラトランド（Rutland）の小さな地域の内外でオーツが活発な伝道活動を続けていたことは報告されていた。1647 年 10 月、オーツは「国家と教会の平和を乱す者」という罪で逮捕され、州知事のアベル・ベーカー（Abel Baker）の元へ送られた。同年 12 月、複数の地域の聖職者たちは議会へ嘆願書を送り、オーツがラトランド、ノーザンプトンシャ（Northamptonshire）、レスターシャ（Leicestershire）、リンカーンシャ（Lincolinshshire）で、それも「納屋や家畜小屋など相応しくない場所で」聴衆に説教していることへの不満を訴えた。これら聖職者はオーツがそのような場所で説教していたことに加え、「教会に乱入して我らの講壇を乗っ取った」ことに対しても糾弾した。より深刻には、たぶんロンドンとあらゆる地域の官憲が、オーツが「最近、『民衆の同意 (The Agreement of People)』と呼ばれる扇動的な文書を書き、それを広めることに力を入れているという、更なる疑いを目にしていた。これはあらゆる初期レベラーズの主張の中で、最も重要な文書の一つであった。議会の命令による逮捕、それからの逃亡、再逮捕、そしてラトランドの巡回裁判への出廷にもかかわらず、訴追事件はある誤解のために証拠不十分となったが、1648 年 5 月には、聖職者たちはオーツが再度「反抗的な集まり」を招集し、「彼の冒涜に道が偽り」と説教し、「君主国に対する最も扇動的で反逆的な語りであるとして、不満を訴えている[12]。

1649 年の春頃、オーツは明らかにある時期、リンカーンシャのジェネラル・バプテストの牧師として定住していた。しかし 1650 年代には、プライド大佐の連隊付チャプレンとしてニューモデル軍とスコットランドにいた。その際、1654 年から 55 年にかけての冬であったが、更に急進的な主張をする軍人たちの仲間としてある不穏な出来事に関係していた。明らかにこれら軍人たちはより民主的な政府を切望し、教会税の廃止を主張したのである。容易には消えてしまうことのなかったこの宗教的・政治的急進主義について、王政復古の直後、オーツはしばらくの間、それに同意し、ヘイスティングで国教会員として生活していたが、これは奇妙なことである。しかし、クロスビーは、オーツは最終的に自分の変節を悔い改め、晩年の 5〜6 年間はトマス・ラムの教会に会員として復帰したと、楽観的に述べた[13]

ヘンリー・デン（Henry Denne）は、元イングランド国教会の聖職者であり、1630 年頃、聖ダヴィデ（St. David）の教区主教から叙階の按手を受けた。1630 年代はほとんど、ハートフォードシャのピルトン（Pyrton）の教会の副牧師であった。その後バプテストの立場を受け入れ、1633 年から 44 年まではベル・アレイの教会に会員として在籍した。トマス・エドワーズによると、その教会は彼を伝道

---

[11] *Gangraena*, II, 146-8, 105f, 189.
[12] A Betteridge, 'Early Baptists in Leicestershire and Rutland', *BQ*, XXV, 1973-4, 206-10.
[13] Crosby, III, 61.

者としてベッドフォードシャやケンブリッジシャに派遣した。ケンブリッジシャ地方議会委員会は彼の活動に異議を申し立て、ロンドンに送った。そこで、短い期間ではあったが投獄された。こののち、明らかにディスブロウ家（Disbrowe family）の肝入りで、ケンブリッジシャ・エルティズレイで教区教会の牧師となった。その間、国家から給与を受け取っていた。彼はベル・アレイの教会をよく訪ねていただけではなく、1645 年 12 月にはトマス・ラムを同伴してロチェスターとカンタベリーへ伝道旅行まで行っていた。カンタベリーで、名前までは分からないが、彼らは一人の農婦にバプテスマを授け、後にそれは「浸礼でバプテスマを施され、不治の病いが癒された」と言われるようになった。恐らくこの時期、彼は荷馬車屋となり（エドワード・バーバーが論じたと記憶されるが）、牧師は「自分の手で働き、この世の仕事に就いて生計を立てるべきである」と信じていた。彼のこの言葉は、もし正しく記録されているとすれば長くは続かず、間もなく自宅のあるエルティズレイから 1 マイルのカックストン（Caxton）に戻ってしまった。しかし、翌年 6 月には、巡回伝道者としてリンカーンシャを巡り歩き、スパルディング（Spalding）で地元の役人 2 名に捕まってしまった。彼らは、デンが真夜中に地域の住民にバプテスマを授けているところを見つけたのだ。

トマス・エドワーズが教会税に反対するデンの説教が彼の名声を高めるのに役立ったと認めざるをえなかったとしても、興味深いのは、エルティズレイでのデンの活動がベル・アレイでトマス・ラムが行っていた活動を反映しているとも記している点である。デンは説教し、祈ったが、詩編の賛美は行わなかった。それが終わると、彼の説教に満足しない者たちが自らの反対意見を公にし、それに対してデンが答えた。また「職人に過ぎない」一人か二人の、またそれ以上の数の男性の会衆が、度々その集会で説教もしていた[14]。

デンの経歴で今だ謎に包まれているのは、1646 年 6 月から 1649 年 5 月のある時期、彼がチャプレンとして入隊したかどうかということである。反対者は、デンがしばらくの間、キリスト者は水のバプテスマのような、肉的で外的な礼典を超えた生き方をすべきであるという立場に惹かれたと仄めかした。おそらく、彼はニューモデル軍について、信教の自由を勝ち取り、権力にある者のほとんどが抵抗した教会税の廃止などの改革を可能にする唯一の方法と見なしていたかもしれない[15]。

いずれにしろ、彼がその次に登場するのは 1649 年 5 月に軍の反乱が失敗したため、バーフォード（Burford）でレベラーズ指導者の 4 人のうちの一人として殺された時である。その際、デンだけが射殺を免れ、間もなく『発見されるに至ったレベラーズ（*The Levellers designe discovered*）』（1649 年）を書いて彼の行状を述べた。その中で彼は、レベラーズの政治的野心に共感したそぶりは一切記さず（このタイトルはそれを思わせるようなものではあるが）、反乱は、彼の信頼が上司の間で陰険な手段によって損なわれたとの流言の結果であるという彼の言い分を説明した。今や彼は次のことを十分に認識していた。つまり、「配属された権威者に服従すること」、そして反乱蜂起に向かう過激なステップが取られる前に、彼が戦時議会（the Council of War）にそれを通報しなかったというこれら両方に対して罪が問われているということを。パンフレットの終わりでは、軍の分裂を避けることの重要性を認

[14] *Gangraena,* I, 76f, 181f; III, 86f.
[15] J. Drew, *A Serious Addresse to Samuel Oates,* 1649, 14 margin.

識していたこと、そして事件においては数人の人間がいかに良い動機を持っていたとしても、多数派のそれとは大きく異なるものだということを忠告した。しかし彼は、その暗い動機の本質に少しも光を当てることはなかったのである。

（続く）